面と南の新川の谷底平野に位置している。平という名もこの地形に由来していると思われる。

平の発展の上で城下町形成の次に大事なのは石炭産業の発達である。平には炭鉱はなかったが，平を取り囲む形で炭鉱が分布していたこと，炭鉱集落においては人口の増加に対し商業活動がきわめて貧弱であったこと，石炭産業によって蓄積された地元資本が大正年間に，平に続々と銀行として現わされたことなどによって，平は産炭地域をヒンターランドとして商業・金融活動を活発化させた。これには平を中心として放射状の道路により平が夏井川流域の交通の結節点となっていたことも見逃せない重大な要因になっている。平から東に広がる海岸平野には旧浜堤が4列認められており，この間夏井川は顕著な自然堤防を形成している。この自然堤防や広い河川敷，旧浜堤では野菜栽培が行われ，砂質地で掘り易いことから特にネギ栽培が盛んである。また海岸付近では米の収穫量が少ないことから養鶏が盛んに行われている。

このように夏井川流域を考察するにあたっては自然条件と人文現象を同じくらい重視して，研究を進めなければならなかった。

福生市の都市化とその地理学的考察

波多野　久仁子

論文構成：第Ⅰ章　自然環境

第Ⅱ章　人文環境

第Ⅲ章　都市化について

私が取扱ったのは，都心から40Kmに位置する福生市の，主としてその都市化についてであるが，それは人口の増加を基本として，商業活動，工業生産活動の伸び，農業の衰退等で実証的に明らかにされた。又，福生市の都市化を促進させた歴史的な背景を探ると，過去においては西多摩の物資の集散地であった事，戦前の陸軍飛行場，さらには，戦後の横田基地等が，存在したことであった。福生市を論ずる場合，東京大都市圏における位置も見逃せない事実となってくるが，福生市は厳密に言うと，区部へのベッドタウンではない。区部に対する通勤，通学依存度から多摩地域をみると，35Km圏で分割して考えられ，福生市の場合，立川市や八王子市をはじめとする周辺部中心地への通勤通学者の住宅地として位置づけられる。しかし，経済の成長と，所得水準の上昇，ならびに教育程度の上昇に対応して，区部への依存度が，高まり，区部へのベッドタウンになる日も近いものと予想される。この論文を書いた目的は，東京大都市圏の中にあり，伝統的地場産業を持たず，市域面積も小さい福生という町が，第2次世界大戦後，米軍横田基地が建設されたことにより，農地を宅地転換へと進め，又商業面においても変化を与え，基地が，就職難の時代においても多くの就業機会を与え，それが戦後の福生に一種の活力を与え，日本経済の成長を背景とし東京大都市圏の中に組み込まれるようになり，しだいに基地経済からの脱皮を目指すようになったその歴史的な発展と今後の発展方向を明らかにすることであった。